

館長だより

山形県産業科学館

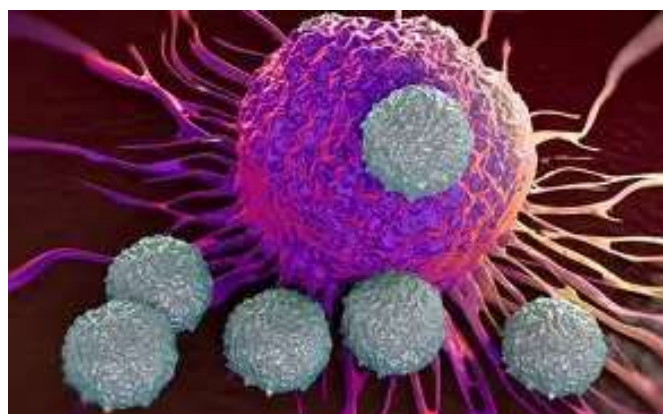
令和 7 年 1 0 月 8 日 (水)

発行 館長 加藤 智 一

イグ・ノーベル賞と本家ノーベル賞

私には先見の明*があるのでしょうか。令和 6 年 8 月 23 日 (金) 発行の館長だより。「ゼブラ柄の牛から学ぶコロナ後の世界」でご紹介した以下の記事、覚えておられますでしょうか。朝日新聞 DIGITAL 2021 年 11 月 14 日掲載と思われる記事の紹介です。『黒い牛をシマウマのようなゼブラ柄に塗装し、アブなどの吸血昆虫の被害を少なくしようという山形県置賜総合支庁農業振興課の実験が小国町の畜産農家であった。黒く温かい所を好むというアブの習性を利用。ゼブラ柄にするとアブが近寄らなくなることが確認できたという。実験では、小国町の遠藤畜産で繁殖牛 3 頭をスプレーでゼブラ柄に塗装した。吸血昆虫が近寄ると、牛は尻尾を振ったり、頭や耳を動かしたりする忌避行動を取るとされ、その動きについて調べた。8、9 月の実験でゼブラ柄の牛は、通常の牛よりアブを嫌う忌避行動が 4~8 割少なかった。同支庁は省力化やえさ代軽減のため、休耕田などを活用した「簡易放牧」を広めようとしている。牛を怖がり猿などが畑に近寄らない効果も期待され、吸血昆虫対策を通じて簡易放牧の取り組みを進める考えだ。』とあります。ということは、今年のイグ・ノーベル賞生物学受賞者は、山形県置賜総合支庁農業振興課か?と思ったら、茨城県の農業・食品産業技術総合研究機構の児嶋朋貴研究員 (41) でした。おそらく初めに発案、研究したのは彼だったのでしょね。チョット残念。それにしても、日本人すごい。19 年連続です。科学の分野においても、ユーモアを忘れない日本人の気質は世界に誇れる文化ではないでしょうか。ブラボー!!

そして、忘れてはいけない本家ノーベル賞。今年のノーベル生理学・医学賞は、大阪大学 坂口志文特任教授 (74) です。免疫が制御される仕組みを発見されました。具体的には、病原体を攻撃する免疫細胞の中に、免疫反応の暴走にブレーキをかける「制御制 T 細胞」の発見です。この細胞が弱いと、関節リウマチなど自身の体を攻撃する自己免疫疾患や、アレルギーのような免疫の過剰反応が起こります。ですから、この細胞の働きを強めることで、自己免疫疾患やアレルギー、臓器移植後の拒絶反応を抑えられる可能性があるのです。一方でこの細胞は、ガン細胞を攻撃する免疫細胞にまでブレーキをかけてしまい、がんを守るように振る舞うこともわかってきました。そこで、逆に「制御制 T 細胞」を弱めてガンの治療をしようではないかという研究も進んでいるそうです。今後どんな発展を遂げるのか、興味が尽きない研究分野ですね。



※ 先見の明 (せんけんのみ)

未来を見通す力、将来起こりうることを予測し、それに備える知恵や洞察力を意味する言葉です。英語では「foresight」や「visionary insight」と訳されることが多いです。

ニュアンス的には、「まだ起きていない事象を見抜く力」とか、「未来の展開を踏まえた上で、今どう行動すべきかを見極める力」とか、「長期的な視点で物事を考え、準備や投資を行う姿勢」なんかを言います。歴史的な視点で言えば、徳川家康は関ヶ原の戦い以前から周到に準備を重ね、江戸幕府を開きました。また、渋沢栄一は、明治期に西洋の資本主義を学び、日本の近代経済の礎を築きました。こんな偉人にならなくても、未来を見据えた想像力は、日頃から鍛えておきたいものです。

